

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 23日現在

機関番号：15301

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2011

課題番号：22790497

研究課題名（和文） 女性医師支援の多面的効果の評価：キャリア支援から地域へ

研究課題名（英文） Evaluation of various effects of career support for female physicians: Career development and contribution to the community

研究代表者

片岡 仁美 (KATAOKA HITOMI)

岡山大学・大学院医歯薬学総合研究科・教授

研究者番号：20420490

研究成果の概要（和文）：我々は、岡山大学で取り組んだ女性医師のキャリア支援が女性医師自身のキャリアと職場に及ぼした影響について調べ、有効な支援のあり方、波及効果について考察した。柔軟な勤務体制は女性医師のみならず、職場からも必要とされる重要な方策であること、病児保育室の導入はキャリアと家庭の両立のために重要な役割を果たすことが示された。職場における連携とサポートを強化する試みは他施設においても有効である可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：We evaluated the efficacy of female physician supporting system at Okayama University. We concluded that "flexible working style" is effective not only for the career development of female physicians, but also for the workplace. In addition, the day care facility for the sick children, established at Okayama University is very useful for the working family. In addition, we applied "networking meeting" for supporting female physician at physician shortage area and we speculated that it would have effect in various area.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：境界医学・医療社会学

キーワード：女性医師 キャリア支援 地域医療 生涯教育 医学・薬学教育

1. 研究開始当初の背景

現在、医師不足と地域・診療科による医師の偏在は解決すべき喫緊の課題であり、それ

に影響する要因の一つとして女性医師の問題が注目を集めている。岡山大学では平成19年に文部科学省の「社会的ニーズに対応した

質の高い医療人養成推進プログラム(医療人GP)」に採択され、女性医療人支援の積極的な取組を行い、3年間の取組で女性医師36名の復職を達成した。取組に先立ち、平成19年度に1364名の岡山大学卒業及び入局の女性医師に質問紙による調査を行った。この調査で就労継続に必要な環境整備について明らかにし、それを踏まえた支援計画を実行した。同調査では、女性医師が産休・育休から原職復帰するのは35.6%であり、復職に際して64.3%の医師が不安を感じていた。また、復職に必要な条件として上司・家族の理解とともに適正な仕事量、院内保育・病児保育などの育児支援が必要であることが明らかとなった。(平成21年第41回日本医学教育学会にて発表)。岡山大学の女性医師支援の柱は①サポートネットワーク構築、②柔軟な復職支援であるが、特に②については短時間勤務制の導入(平成20年)、病児保育施設の運用開始(平成21年)などの新しい取組を行った。本研究では、これらの新たな取組の長期的効果について検証する。

2. 研究の目的

(1) 女性医師支援制度のアウトカム評価

①意識調査: 支援制度の導入によって復職した医師、またその医師を支える職場の同僚・上司にどのような意識変革が起こったのかを評価する。

②フォローアップ調査: 制度を利用して復職した医師の経時的な意識調査を行い、柔軟な勤務を可能とした支援制度が女性医師の現場復帰に長期的効果があるのかを評価する。

③病児保育施設の実効性評価: 病児保育施設の利用状況、疾患分布の調査を行い、育児支援事業としての役割を評価する。

(2) 女性医師支援制度の汎用性の評価

岡山県において特に医師不足が顕著な県北

地域において同様の支援の試みを導入し、大学病院以外の医療機関に応用可能な汎用性の高い制度であるのかを明らかにする。

(3) 女性医師の empathy に関する解析

Empathy は「共感」と訳されるが、医師のプロフェッショナリズムを形成する要因の一つであり、患者中心のより良い医療の提供に不可欠である。また、睡眠不足や過度のストレスなどが empathy を低下されることも知られている。女性医師の empathy について解析し、離職防止への方策を検討する。

3. 研究の方法

(1) 女性医師支援制度のアウトカム評価

①意識調査: 岡山大学女性医師支援制度を利用して復職した医師が存在する臨床系講座の上司・同僚に自記式アンケートを行った。設問に対して5検法で回答し、一部に自由記載欄を設けた。

②フォローアップ調査: 岡山大学女性医師支援制度を利用中の医師に対してヒアリング調査を行った。

③病児保育施設の実効性評価: 平成21年度に設立された病児保育施設の利用者に対して自記式アンケートを行った。設問に対して5検法で回答し、一部に自由記載欄を設けた。

(2) 女性医師支援制度の汎用性の評価

岡山県において医師不足が顕著な県北地域A病院、県西部(県境部)B病院、県東部(県境部)C病院の4病院において岡山大学の女性医師支援の柱の一つである「サポートネットワーク構築」のための会を行った。会は①女性医療人支援の取組説明②女性医師による自分の経験の発表③病院長による自施設での今後の男女共同参画への抱負、の3部構成とし、参加者に5検法で印象を尋ねる無記名の自記式アンケートを行った。

(3) 女性医師の empathy に関する解析

平成19年度、平成21年度に岡山大学卒業及び

入局の女性医師1364名に質問紙による調査を行い、データベースを作成した。今回、データベースを用いて女性医師のempathyに関するサブ解析を行った。Empathyの評価についてはJefferson Empathy Scale(JSE)を用いた。

4. 研究成果

(1) 女性医師支援制度のアウトカム評価

①**意識調査**：アンケート実施期間：平成 23 年 5 月-7 月、対象者：岡山大学女性医師支援制度を利用して復職した医師が存在する臨床系講座の上司・同僚、回収率：配布数 312、回答数 201（回収率 64.4%）であった。回答者の属性は男性 152 名（76%）、女性 46 名（23%）であった。また、回答者の平均年齢は 36.7 歳、回答者の診療分野は 17 診療科であった（全診療科の 70.3%）。

*単純集計結果

＜女性医師支援制度の周知度＞回答者全体では「よく知っている」：52 名（25.9%）、「何となく知っている」122 名（60.7%）という結果であった。上司については「よく知っている」が 43 名（39.1%）、同僚では 9 名（9.9%）と人事にかかわる上司の周知度が高かった。＜復帰する女性医師（利用者）にとっての制度の有用性＞回答者全体では「大変有用である」：97 名（48.3%）、「有用である」78 名（38.8%）と、その有用性が高く評価された。職位による回答の差異は顕著ではなかった。

＜利用者のキャリア形成に関する有用性＞回答者全体では「大変有用である」：41 名（20.4%）、「有用である」101 名（50.2%）と、その有用性が高く評価された。職位による回答の差異は顕著ではなかった。

＜職場にとっての制度の有用性＞①「制度の有用性」について：回答者全体では「大変有用である」63 名（31.3%）、「有用である」89 名（44.3%）と、有用性が評価された。上司に

については「大変有用である」が 46 名（48.3%）、同僚については 17 名（18.3%）と上司からの評価がより高かった。②「利用者の職場貢献」回答者全体では「大変貢献している」23 名（11.3%）、「貢献している」76 名（37.8%）と、有用性が評価された。上司については「大変貢献している」が 18 名（16.4%）、同僚については 5 名（5.5%）と上司からの評価が高かった。＜職場にとっての制度の問題点＞①「職場での不公平感」について：回答者全体では「全くない」39 名（19.4%）、「あまりない」72 名（35.8%）と、問題視しないとする意見が過半数であった。上司については「全くない」25 名（22.7%）、同僚は 14 名（15.4%）と上司からの方が問題ないとする意見が多い傾向であった。②「当直やオンコールの全面免除の是非」について：回答者全体では「全く問題ない」38 名（18.9%）、「あまり問題ない」60 名（29.9%）と、問題視しないとする意見が半数程度であった。職位による回答の差異は顕著ではなかった。

*クロス集計結果

性別、職位でクロス集計を行った。多くの設問で性別、職位による著しい差異はなかったが、利用者のプロフェッショナリズムについての問い、人事における公平感などの問いでは女性上司とその他の属性では回答の傾向が異なり、女性上司は復帰した女性医師に対して高いモチベーションを求めると共に、周囲とのバランスも重視する傾向が見られた。

＜まとめ＞

女性医師の積極的な復帰を可能とした「柔軟な勤務体制」は、職場にも受け入れられており、復帰した女性医師を支える環境が整ってきていることが示唆された。人事を担当する上司はより深く制度を理解しており、そのことが理解度を高めていることも示唆され、同僚など若年世代への周知や、若年世代のニー

ズ調査が必要であると考え。また、女性上司は母集団が少ないため、統計学的な比較が困難ではあるが、男性上司や同僚とは異なる傾向が見られ、詳細な解析が今後必要である。

②フォローアップ調査：ヒアリング調査実施期間：平成 22 年 6 月-7 月、対象者：岡山大学病院女性支援枠（平成 22 年度時点で「復帰支援枠」に名称変更）を利用中の医師（利用者）26 名。回答者の属性：全員が女性であり、所属診療科は 16 診療科と多岐にわたった。利用者の卒業年度は平成 8-12 年度（卒後 10-14 年）が 10 名(38%)、平成 13-17 年（卒後 5-9 年）が 9 名(34%)であり、卒後 5-15 年（30 歳代）の利用者が多数を占めたが、その他の年齢にも利用者が存在した。

＜支援枠利用の理由と配偶者＞

支援枠利用の理由は子育てが 22 名(84%)と大半を占めたが、妊娠、介護等を理由とするものもあった。配偶者については医師が 14 名(53%)であった。

＜利用者の業務内容＞

利用者の業務内容は外来診療が 16 名(61.5%)と過半数を占めるが、入院診療が 3 名(11.5%)、検査・手術 1 名(3.8%)であった。

＜今後の利用について＞

子育てで支援枠を利用している 22 名については、「今後数年利用したい」が 14 名(63.3%)と最多であり、「就学前まで」3 名(13.6%)、「小学校卒業まで」1 名(4.5%)という意見もあった。「いつまでも利用したい」としたのは 4 名(18.2%)であった。

＜地域医療貢献について＞

大学病院勤務日以外に地域の医療機関でも勤務している医師は 19 名(86.3%)であった。そのうち 14 名(63.3%)が「週 1-1.5 日の地域医療機関の勤務」を行っていた。大学病院への復職を行う際に地域医療機関でも一定の割合で勤務する勤務態様が多く、女性医師の地

域医療への貢献が示唆される。

＜まとめ＞

平成 20 年より開始し、現在 5 年目を迎えている岡山大学病院のキャリア支援枠（旧名称：女性支援枠、復帰支援枠）の利用者のヒアリングを行うことにより、復帰した医師の職務内容、今後の希望が明らかになっただけでなく、女性医師の地域医療への貢献も示唆された。今後、さらに調査を継続する予定である。

③病児保育施設の実効性評価：アンケート実施期間：平成 22 年 10 月、対象者：岡山大学ますかっど病児保育ルームに事前登録している保護者、回収率：配布数 110、回答数 77（回収率 70.0%）であった。回答者の属性は看護師 40 名(57.1%)、医師 13 名(18.6%)、事務職員 10 名(14.3%)、その他 14 名(18.2%)、女性 67 名(87.0%)、男性 10 名(13.0%)であった。病児保育ルームの実効性については上記のうち実際に施設を利用した 36 名に対して調査を行った。

＜病児保育ルームの実効性について＞①「保育に対する満足度」について：「大変満足」24 名(64.9%)、「満足」11 名(29.7%)と利用者の満足度は大変高かった。「スタッフの対応に対する満足度」について：「大変満足」28 名(75.7%)、「満足」11 名(24.3%)と利用者のスタッフに対する満足度は大変高かった。

＜病児保育ルームが職場に与えた影響について＞①「働くうえでの安心感」について：

「とても安心して働ける」35 名(45.4%)、「安心して働ける」25 名(32.5%)と、保護者の安心に寄与している可能性が示唆された。

「病児保育があるので職場に長く勤めたいか」について：「是非とも長く勤めたい」16 名(20.8%)、「長く勤めたい」23 名(29.9%)と病児保育の存在が職場定着にも関与している可能性が示唆された。

<まとめ>

平成 21 年度の病児保育ルーム開設後から順調に利用者数が増加し、働きやすい職場を支える存在として確立しつつある(図 1)。今後、病児保育が親に与える影響のみならず、家族、また児に与える影響などについても検討したい。



図 1 病児保育ルーム利用者数の推移

(2) 女性医師支援制度の汎用性の評価

医師不足地域である岡山県北部 A 病院(平成 22 年 9 月)、県西部(県境部) B 病院(平成 23 年 2 月)、県東部(県境部) C 病院(平成 24 年 1 月)に女性医療人のサポートネットワークの構築を目的とした会を開催した。参加者のアンケートの解析結果は以下の通りである。

「女性医療人支援の取組説明」については、「大変良い」とする回答が全ての施設で 30%を超えた。「女性医師による自分の経験の発表」については「大変良い」とする回答が全ての施設で 55%を超えた。「病院長による自施設での今後の男女共同参画への抱負」は「大変良い」とする回答が施設によって 35%から 50%とばらつきがあった。

参加者は、いずれの病院も医師以外の医療職が多かったが、自由記載では「女性医師の体験談が非常に良かった」「女性医療人を皆で支える病院にしたい」とする意見が数多くみられた。

<まとめ>

岡山大学で行っているサポートネットワーク構築の会は、他施設でも同様に有効である可能性があるが、アウトカムの評価について

今後検討が必要である。

(3)女性医師の empathy に関する解析:女性医師の empathy について 285 名分のデータのサブ解析を行った。日本人女性医師の JSE は平均 110.4、Cronbach の係数 α は 0.81 で日本語版 JSE の信頼性及び妥当性が示された。内科、精神科など”people-oriented”な診療科を専門とする医師では JSE のスコアは高く、過去の報告と一致している。親との同居、近隣に住む、などの環境は JSE の高値と相関していた。

<まとめ>

過度なストレスや燃え尽きは empathy の低下をもたらすことが知られており、empathy を保つことはより良い診療を行うためにも、医師自身のためにも重要である。Empathy を保てる環境は離職を防ぐ環境要因としても重要であることが示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

- ① Hitomi Kataoka, Hojat M, Gonnella JS, Koide N, Measurement and Correlates of Empathy Among Female Japanese Physicians, BMC Medical Education, 査読有, in press, 2012
- ② 片岡仁美, 医療人育成の現況と課題、岡山医学会雑誌、査読有、124、2012、41-45
- ③ 片岡仁美, 岡山発女性医師支援:岡山 MUSCAT の紹介と実績-トレーニングと柔軟な働き方が可能にした 37 名の復職、医学のあゆみ、査読有、233、2010、1111-1116
- ④ 片岡仁美, メンタル支援策としての MUSCAT WEB と男性を巻き込むサポータークラブの設定、Visual Dermatology、査読有、2010、696-697

[学会発表](計 11 件)

- ① 片岡仁美、女性医師のライフサイクルとキャリア形成に関する解析、第 26 回日本女性医学学会学術集会、2011 年 11 月 13 日、神戸
- ② 川畑智子、片岡仁美大学における病児保育施設の果たす役割、第 17 回日本保育園保健学会、2011 年 11 月 13 日、岡山
- ③ 片岡仁美、女性医師支援 岡山大学の取組と今後の課題、第 10 回日本消化器病学女性医師・研究者の会、JDDW、2011 年 10 月 21 日、福岡
- ④ 片岡仁美、岡山大学学生の地域医療に関する意識調査、第 43 回日本医学教育学会、2011 年 7 月 22 日、広島
- ⑤ 片岡仁美、岡山大学病院における女性医師支援 - 求められるキャリア支援を目指して - 第 9 回 JSWN 総会、日本女性腎臓病医の会、2011 年 6 月 17 日、横浜
- ⑥ 片岡仁美、医学生における Empathy (患者への共感) の男女差と女性医師における Empathy についての考察、日本性差医学・医療学会第 4 回学術集会、2011 年 2 月 4 日、下関
- ⑦ 片岡仁美、大学病院における女性医師支援の取り組みとその問題点「女性医師支援プログラムの未来像を求めてー最先端の取り組みを考えるー」、第 60 回日本アレルギー学会秋季学術大会、2010 年 11 月 27 日、東京
- ⑧ 片岡仁美、岡山医療圏の女性医師の意識調査(第二報) 卒後 10 年が支援の鍵、第 42 回日本医学教育学会、2010 年 7 月 31 日、東京
- ⑨ 川畑智子、片岡仁美、岡山大学病院看護職員のワークライフバランス(WLB)に関する意識調査、第 42 回日本医学教育学会、2010 年 7 月 31 日、東京
- ⑩ 川畑智子、片岡仁美、岡山大学キャリア

センターによる岡山大学病児保育室開設における取り組み、第 20 回全国病児保育研究大会、2010 年 7 月 18 日、東京

- ⑪ 片岡仁美、施設の支援活動：岡山大学の取り組み「男女共同ですすめる腎臓学のキャリアプラン」、第 53 回日本腎臓学会学術総会、2010 年 6 月 17 日、横浜
- [図書] (計 1 件)

①片岡仁美 (分担)、株式会社三恵社、新しい医学教育の流れ' 11 冬、2011、103-108

[その他]

ホームページ等

<http://www.okayama-muscat.jp/okayama/category/report/other>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

片岡 仁美 (KATAOKA HITOMI)

岡山大学・大学院医歯薬学総合研究科・教授

研究者番号：20420490

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

(4) 研究協力者

川畑 智子 (KAWABATA TOMOKO)

岡山大学・大学院医歯薬学総合研究科・助教

研究者番号：90600669

Mohammadreza Hojat

Thomas Jefferson University

Center for Research in Medical Education and Health Care

Joseph S Gonnella

Thomas Jefferson University

Center for Research in Medical Education and Health Care